

ジンカにて ■ 重田真義

ジンカの町並みを見下ろす丘の上に南オモ研究センター・博物館(略称SORC:South Omo Research Center/Museum)はある。4年ほど前から使われなくなった飛行場の滑走路が、町の中心まで達している。その先に延びた道を10分ほど歩いて上ると、SORCの庭にたどりつく。

およそ10年前、SORCは、アジスアベバ大学エチオピア研究所(IES)の付属施設として、南部諸民族州南オモ県ジンカ市に設置された。

昨年、建物の建設と運営に尽力されたドイツの人類学者イヴォ・ストレッカー博士が退職された。これを受けて運営評議会のメンバーにドイツからマックスプランク研究所のギュンター・シュレー博士が、日本からは私に加わり、2009年1月SORCは新しい時代を迎えることになった。

南オモ地域でフィールドワークをおこなう研究者にとってSORCは、調査の準備や情報交換、ゲストハウスでの宿泊や休息などを気軽におこなえるフィールドステーションの役割を果たすようになった。併設される博物館には、南オモに暮らす人びとの物質文化が展示されており、文献や映像資料も備えている。諸外国からの観光客で賑わうだけでなく、地元の学生や市民が週末に訪れる憩いの場としても機能している。

現在SORCには、16人のエチオピア人スタッフとともに、2人の外国人、ソフィアさん(Sophia Thubauville, 独マックスプランク研究所)と久田信一郎さん(京都大学)が常駐していて細やかに研究者の便宜をはかってくれている。南オモ方面に行かれる方は是非とも立ち寄って、利用していただきたい。大歓迎されるだろう。

時代は遡って、このSORCのできるずっと前の1970年代初め、ジンカに博物館を開設する計画があったことを知る人は少ないだろう。ジンカが県庁だった当時のガモ・ゴファ州ハメル・バコ県の知事に依頼された故福井勝義先生(当時東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手)が、その博物館構想を起案したという。先生からはエチオピアで何度かその話をうかがったが、残念ながら計画書の実物を見せてもらう前に逝かれてしまった。資料をととても大事にされる福井先生のことだから、きっとどこかに残しておられるのではないかと思う。

現在のSORCの建設場所を丘の上に決めたのは、アジスアベバ大学のゲブレ・インティソ博士と私である。当時福井先生に報告したら、よい場所だと言ってもらった記憶がある。このSORCのある丘に、今年度、日本政府外務省の草の根文化無償資金による支援をうけて、市民向け図書館を含む研究棟が新たに建設される予定である。

近傍の村人たちがシャベルや鍬をもって数百人も集まり、時にはジンカ市長も参加して、毎週土曜日の朝6時頃から建設予定地の整地作業をしてくれている。ジンカに初めてできる公共図書館への期待が非常に高いことを目の当たりにして、むしろ今後のSORC運営への責任の重さを感じずにはいられない。

エチオピアにきた人たちは、研究者や実践者によらず、報道、貿易、芸術、外交などさまざまな分野で関わりをもった人たちは、必ずこの地を再訪するという。アフリカの水を飲んだ人はアフリカに戻ってくる、という諺が、エチオピアでも実際に強く作用しているようだ。地域への関わりを強く感じてこの地に戻ってくる人たちだけでなく、一度だけ訪れた人たちも不思議なことにエチオピアへの関心を長く維持している。例えば、単なる親睦団体の域を超えてエチオピアへの貢献活動を展開されている社団法人エチオピア協会の存在はその証しであろう。

翻って、同じようにエチオピアとその周辺地域に関心をもつ人びとが集う日本ナイル・エチオピア学会の役割は、今後どのように展開していけばよいのだろうか。これから新たにエチオピアと関わろうとする人たちをどのように私たちの学会は迎えることができるのだろうか。地域社会と長く深い関わりを維持してきた研究者や実践者が中心となって、今いちど改めて問い直してみる時期にさしかかっていると思われる。

ジンカの丘の上に草の根文化無償資金援助によって生まれる建物は、これまで南オモ地域で研究と実践をおこなってきた私たちの、新たな関わりのはじまりと位置づけている。ご遺族の許しが得られれば、その建物のホールに福井先生にちなんだ名前をつけようと考えている。

(しげた・まさよし/京都大学・日本ナイル・エチオピア学会副会長)